

| | |
|-----------|--|
| <p>1</p> | <p>加西の教育のありたい姿 (学校教育課)</p> |
| <p>現状</p> | <p>(1) 時代が求める教育観（新学習指導要領の趣旨）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会のあり方が劇的に変わる Society5.0 やコロナ禍によって、児童生徒一人一人が、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を自ら切り拓き、持続可能な未来社会の創り手となることが求められている。 ・よりよい社会を創るという理念を、学校と家庭、地域とが共有し、必要な学習内容をどのように学び、どのような「資質・能力」を身に付けられるように教育するのかを明確にしながら、「社会に開かれた教育課程」を実現することが重要である。 <p>(2) 加西市の子どもの現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・加西市教職員による「加西市教育のあり方勉強会（R3.8.18）」では、加西市の子どもの長所について、「粘り強い」「素直で真面目」「基本的な学習や生活習慣が身につけている」「地域の支えがある」「自然と共生している」等の意見があり、一方、課題としては、「周囲の評価を気にする」「たくましさに欠ける」「自発性に欠ける」などの意見が見られた。 <p>(3) 加西 STEAM 教育（探究的な学び）の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3期加西市教育振興基本計画「郷土を愛し豊かに未来を拓く人づくり～人生100年時代を生きる～」の理念のもと、子どもたちが探究的な見方・考え方を身に付け、ICTを存分に活用しながら、現実的な問題を発見、解決する力を有する人づくりをねらいとして、「STEAM教育」を推進している。 ・激変する社会や加西市の子どもの現状等を鑑み、自分が育った自然や風土を原風景として、他者との関りの中で、自ら「問い」を立て、考え判断し、行動できる力を育む。そして、自分の力で新しい価値を創造し、未来に挑戦していける加西っ子の育成を目指す。 |
| <p>課題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・全国学力・学習状況調査の児童生徒質問調査からは、「今住んでいる地域の行事へ参加している」という設問に対しては、肯定的に答えた児童生徒の割合が高い一方、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」という設問に対しては、肯定的に答えた児童生徒の割合が低い。 ・「加西市教育のあり方勉強会」では、従来の知識・技能を習得する学習指導にとどまらず、児童生徒の五感を豊かにし、新たな時代にチャレンジする人間力や地域との協働性を高める「学びの転換」の必要性を確認した。 ・教育のあり方を考えると同時に、人口減少社会における地域コミュニティの核としての学校のあり方も考える必要がある。 ・未来の加西市を担う子どもたちの育成を目指す上で、一方向・一斉型の授業ではなく、子どもたちが自ら課題を発見し、主体的に学び合い、問題意識を解決しようとする活動など、協働的な学習を通じて、意欲や知的好奇心を十分に引き出すことが求められる。 |

| | |
|-----------|--|
| <p>2</p> | <p>小中学校の再編についての基本的な考え方 (教育総務課)</p> |
| <p>現状</p> | <p>(1) 小中学校の再編に関するこれまでの経緯</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 23 年、「加西市学校あり方検討委員会」から次の答申を受けた。 <ol style="list-style-type: none"> ① 国の耐震基準を下回る校舎の早期改築、耐震整備を行う。 ② 学校規模のガイドラインを設け、児童生徒数が段階的な目安に達した地区から保護者、住民とともに再編に向けての協議を開始する。 ③ 小中一貫教育を推進し、既存の分離型から一体型の小中一貫学校を目指す。 ・平成 24 年以降、加西市は答申に沿って老朽校舎の改築、耐震化を進めた。統廃合の議論については保留とし、「小中学校の存続、16 校堅持」の方針を固めた。 ・小学校においては地域の拠点として校区単位に「ふるさと創造会議」を設け、地域の活力向上と魅力づくりに精力的に取り組んでいる。 ・小中一貫教育に関しては、小中連携教育として、「0 歳から 15 歳までの一貫した教育」を重点項目として、小 1 プロブレム、中 1 ギャップの解消に取り組んでいる。 <p>(2) 国の配置基準と小規模校に関する教員アンケート結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法令の規定による学級編制や職員配置の基準が設けられており、児童生徒数に応じて教職員が配置される仕組みとなっている。また、文科省においては学校規模に関する考え方が示されている。 ・令和 2 年度の出生数は 190 人にまで下がった。学校の小規模化により 4 中学校の 1 つでは単学級化が始まり、小学校では複式学級の発生も見込まれている。 ・令和 2 年度、市内教職員に小規模校についてのアンケート調査を行い、小規模校のメリット、デメリットに関する意見回答を得た。 <p>(3) 教育環境整備と施設の長寿命化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和 2 年度、加西市は、学校施設の良い状態を維持し、より良い教育環境を持続的に確保するため、「加西市学校施設等長寿命化計画」を策定し、予算の平準化、トータルコストの縮減に取り組んでいる。 |
| <p>課題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・文科省によれば小中学校の規模は 12 から 18 学級が概ね妥当とされるが、地域の状況を勘案しながら、その規模を考える必要がある。 ・小規模校では一人一人の学習状況を的確に把握でき、きめこまやかな指導ができる利点がある。大規模校ではその利点を生かすための工夫が求められている。 ・学校の小規模化は教職員数の減少につながり、職員一人当たりの校務負担が増大する傾向にある。中学校においては免許外指導の教科が発生し、指導者不足による部活動の運営に支障が生じている。 ・加西市の全公共施設で大きな割合を占める学校施設の老朽化が進むにつれて、今後、大規模改修や建替えに多額の費用が必要となる。 |

| | |
|-----------|--|
| <p>3</p> | <p>地域との連携による学校づくりについて (総合教育センター)</p> |
| <p>現状</p> | <p>(1) 学校運営協議会の設立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・加西市は学校と地域の結びつきが深く、地域と連携した教育活動は大変充実している。 ・国や県の方針に沿って、加西市は「地域に開かれた学校づくり」から一歩進めた「地域とともにある学校づくり」をめざすため、「地域学校協働本部」と「学校運営協議会」の設立に向けて取り組んでいる。 ・加西市では学校評議員制度が定着しているので、それを発展させる形で「学校運営協議会」への移行を予定している。令和3年度は「加西市学校運営協議会規則」を定め、制度の周知を行っている。 <p>(2) 地域学校協働活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域による学校支援活動として、すべての小学校区で地域子ども見守り隊やワッシュョイスクールなどの学校安全ボランティアの活動がある。また、地域の協力を得て、地域人材を活用した水稻栽培や食育、自然観察、史跡見学など、学校だけでは実現しない様々な体験学習を展開している。 ・土曜日等の休業日の体験活動として「土曜チャレンジ学習」がある。PTA・子ども会・ふるさと創造会議と連携を図り、地域と密着した教室を行っている。また、中学生を対象とする学習支援活動として「かさい未来塾」を実施している。静かで空調の効いた環境で学習ができ、生徒からは好評である。 <p>(3) 学校と地域との連携活動に対する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・加西市の児童生徒は、「自分に良いところがある」、「人の役に立つ人間になりたいと思う」、「地域や社会の出来事に関心がある」などの質問で全国平均を上回っている。その一因として、地域と連携した様々な体験を通して、郷土の歴史や文化、自然、地域社会の特色について理解を深めるとともに、自尊感情や生命・自然を大切に心、ふるさとを愛する心など、豊かな心を育てていると考えられる。 ・地域の支援者からも、「学習の役に立てて嬉しい」、「大人になったら伝統文化を受け継ぎ地域の発展に貢献してほしい」といった喜びや願いが聞かれる。 |
| <p>課題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・学校評議員制度から学校運営協議会への移行を円滑に進める必要がある。 ・見守り活動を行うボランティアの高齢化が進み、新たな人材の確保が急務である。 ・地域と学校との協働活動には多くの手間隙が必要で、時間確保が課題である。 ・土曜チャレンジ学習の講師確保等、事業実施のための支援策、費用負担が必要である。 ・かさい未来塾の開催日数や時間、場所等を、生徒の要望にもさらに耳を傾けながら、一層工夫する必要がある。 |